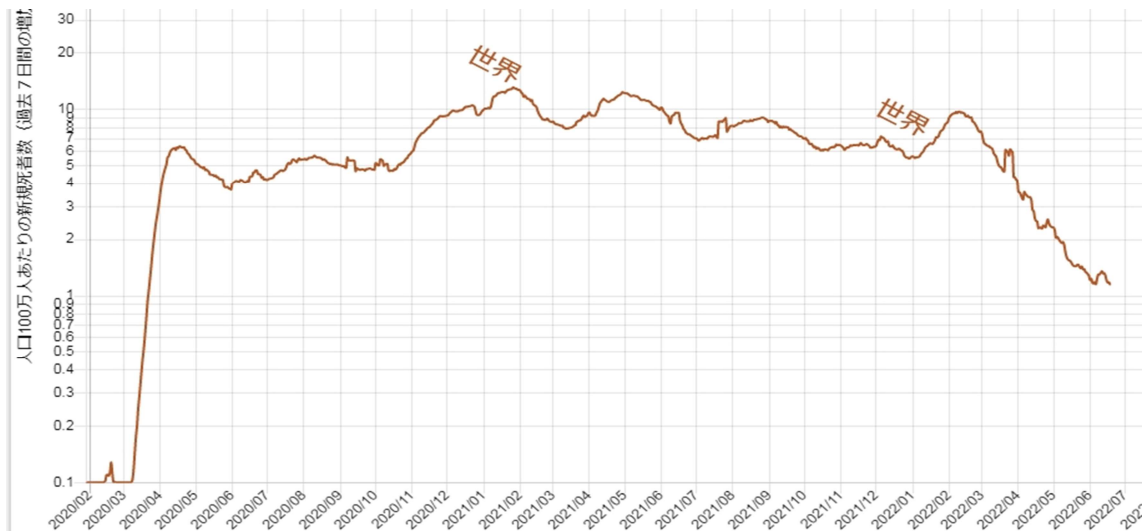
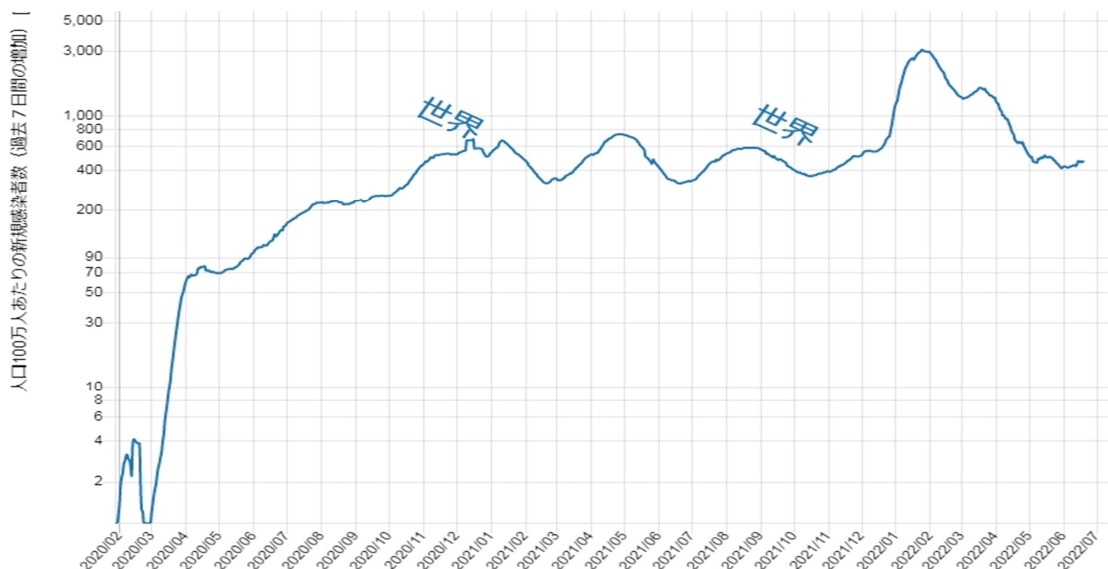


## 第五話 「コロナ禍の終わり」四つの兆候

毎朝、私は新型コロナの統計を確認するのが習慣になっています。下図はその一つです。先月のある日ふと、コロナ禍は終わったのではないかと期待が脳裏に浮かぶようになりました。「本当ですか」と聞かれれば、「多分、ですが」としか言えませんが、コロナ禍は終わりはじめたと思っています。

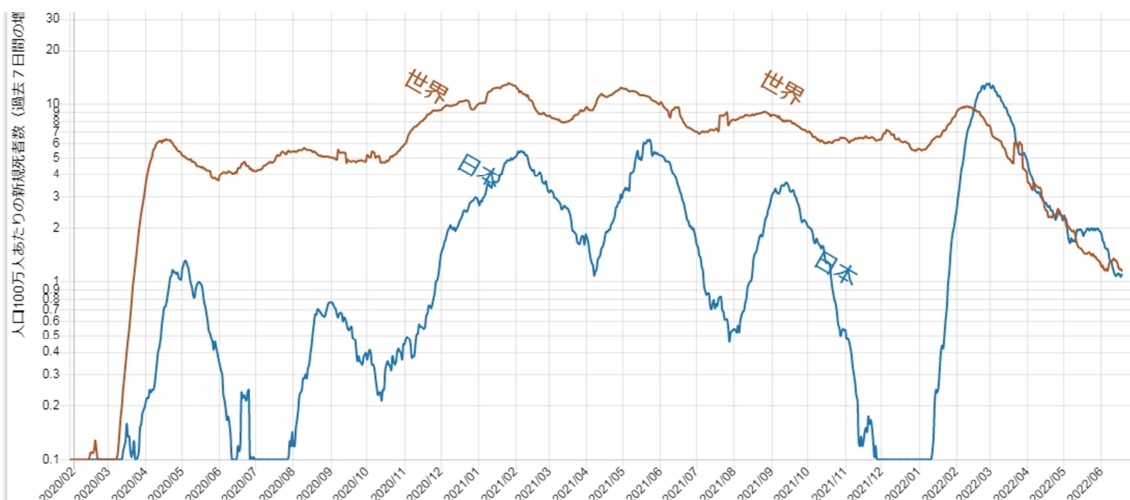


グラフは札幌医大が逐次公開している世界の新型コロナによる死者数です<sup>1</sup>。2022/2 をピークに死者数は最近4か月で約1/10に減っています<sup>2</sup>。こんな大きな減少は、コロナ禍が始まって以来過去二年間なかったことです。日本は今、最大の第六波の中であって、日本に



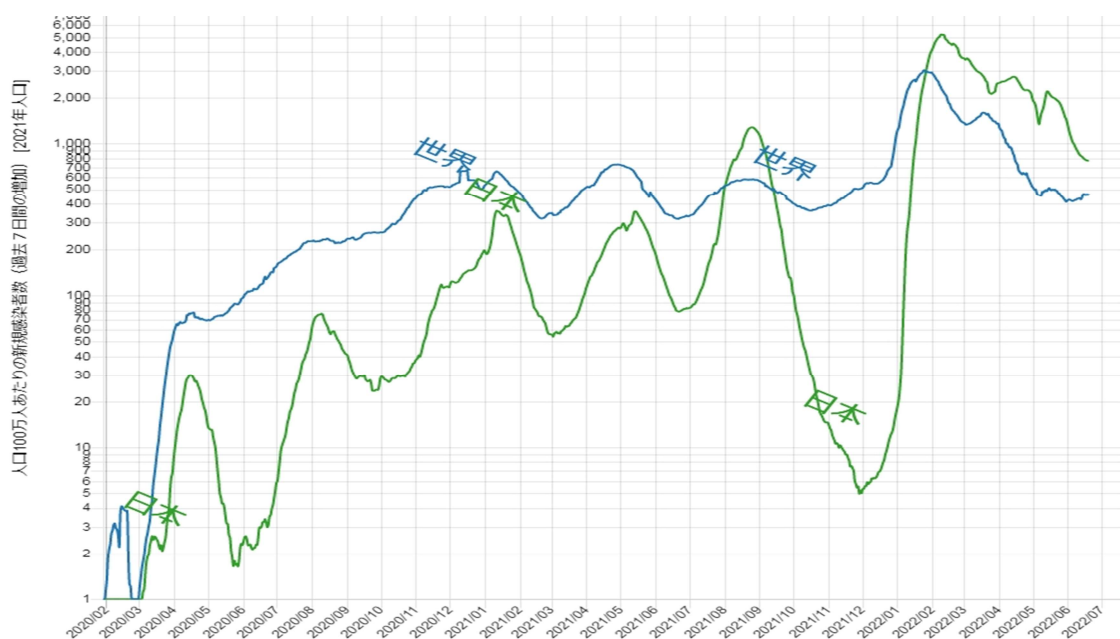
<sup>1</sup> <https://web.sapmed.ac.jp/canmol/coronavirus/death> (人口100万人あたり)

<sup>2</sup> 対数グラフでの直線的現象は、同じ割合で減り続けていることを意味する。これは同じ理由で減少しているのだろうと想像させる。



限らず一つの国に注目するとどの国も流行の大きな波があります。しかし全世界で集計すると死者数は前頁上図のように動きがシンプルです。2020/4 から世界でずっと同じくらいの死者数が続いてきました<sup>3</sup>。ところが今年2月から、一気に減り始めているのです。

「コロナ禍の終わり」の兆候はそれだけではありません。先週のニュースでは世界で感染者数がまた上昇に転じたと報じられましたが、前頁下の図は世界の感染者数の推移です。2020/4 の最初の感染爆発後も、ほぼ一貫して感染者数は増え続けています。今年に入って感染者数が減ったかのように見えますが、それは2022/1 頃の急増分が清算されたとみるべきです。全体的な上昇傾向は少しも衰えていません。細かく見れば、報じられるように最近一カ月はまた小さく上昇しています。でも、これら上昇こそ「コロナ禍の終わり」の第二の兆候です。なぜなら、感染者数が増えて死亡者数が減っているということは死亡率が



<sup>3</sup> 総計は 2022/6 現在 600 万人超の死者数。

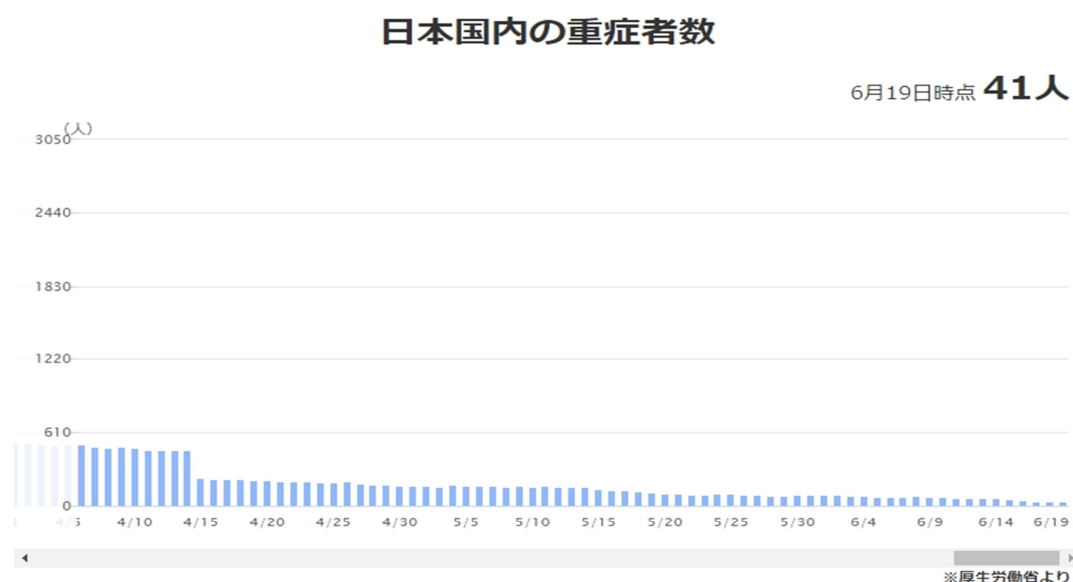
減っていることを意味するからです。これが世界で起きている大きな変化です。もし感染者数が減少してそれにとまって死亡者も減っているなら、それは当然のことで、何かのきっかけでまた感染者数が増えれば、また死亡者も増えるだろうと予想されます。しかし現実には、世界で徐々に感染者数が増え続けている中で死者数が減っています。次に日本の患者数をみてみましょう。

さきほどの世界の統計に日本の統計を重ねてみます。前頁上図は日本と世界の死者数のグラフです。わかるのは、第一波から五波に比べると今年一月からの日本の第六波は格段に大きな波だということです。それまでの二～三倍の死者数です。「日本人はなぜかコロナにかかりにくい」と言われてきました。確かに昨年まではそうでしたが、第六波の死者数は世界平均を超えています。ただそれでも、ピークアウトしたあとは世界と日本の二つのグラフがもつれあうように、死者数が減り続けています。

前頁下図は日本の感染者数の推移です。第六波は感染者数もやはりそれまでと比べて格段に多かったこと、しかもピーク後の減り方はゆっくりです。第六波は巨大です。やっと第六波の終息がみえてきた今でも実は、第一波から第四波のピークをはるかに超えた感染者数です。

これら日本のグラフをみて本当に「コロナ禍の終わり」と言えるのか。日本にはもう少し詳しいデータがあるので、今度は日本の重症者数の推移をみてみます。

NHK や東洋経済などが重症者数のグラフを提示してくれているのですが、下図のようにとても残念なグラフです<sup>4</sup>。



仕方がないので、グラフの値を読んで第一波から第六波のピーク時の一日の患者数を書き出してみました（次頁表）。ピークの日付は多少前後しているかもしれませんが、大まか

<sup>4</sup> 横軸はスライドバーで動かせるが、縦軸が対数ではないので低い値がつぶれ、変化がわかりにくくなっている。

な傾向はわかります。表をみると、感染者数がピークとなってその約二週間後に重症者数がピークになり、そのまた約一週間後に死者数がピークになることがわかります。この規則的な間隔は、臨床的にも妥当な数字といえます。ちなみに、ここで「重症者」とは人工呼吸器がつけられたり集中治療室に入った人のことです。

| 一日の人数   | 感染者数      | 重症者数      | 死者数       |
|---------|-----------|-----------|-----------|
| 第一波のピーク | 2020/4/15 | 2020/5/2  | 2020/5/9  |
| 人数      | 552       | 321       | 50        |
|         |           | 58%       | 16%       |
|         |           |           | 9%        |
| 第二波のピーク | 2020/8/9  | 2020/8/23 | 2020/8/30 |
|         | 1485      | 262       | 17        |
|         |           | 18%       | 6%        |
|         |           |           | 1%        |
| 第三波のピーク | 2021/1/8  | 2021/1/26 | 2021/2/10 |
|         | 8045      | 1043      | 121       |
|         |           | 13%       | 12%       |
|         |           |           | 2%        |
| 第四波のピーク | 2021/5/14 | 2021/5/25 | 2021/5/27 |
|         | 6268      | 1413      | 113       |
|         |           | 23%       | 8%        |
|         |           |           | 2%        |
| 第五波のピーク | 2021/8/20 | 2021/9/2  | 2021/9/10 |
|         | 25975     | 2221      | 87        |
|         |           | 9%        | 4%        |
|         |           |           | 0.30%     |
| 第六波のピーク | 2022/2/9  | 2022/2/24 | 2022/2/22 |
|         | 104013    | 1503      | 272       |
|         |           | 1%        | 18%       |
|         |           |           | 0.20%     |
| 直近      | 2022/5/26 | 2022/6/10 | 2022/6/17 |
|         | 27693     | 69        | 23        |
|         |           | 0.20%     | 33%       |
|         |           |           | 0.10%     |

たとえば第一波を見ますと、感染者数は2020年4月に552人/日とピークに達します。今からみるととても少ない感染者数です。しかし驚くのは重症者数で、約二週間後に321人、感染した人の半分以上の人が人工呼吸につながった計算になります。当時はまだコロナのPCR検査が十分になされておらず、実際の患者数はもっと多かったと想像され、これほど重症化率は高くなかったとも想像できます。それでも感染者の多くが人工呼吸器を必要としました。死者数も多くて、死亡率は9%（死者数下段の%）です。実際の感染者数をもっと多かったとしても<sup>5</sup>、それでも恐ろしい感染症です。人工呼吸器の治療をしても重症

<sup>5</sup> 当時のPCR検査体制は全く不十分だった。

者の16%（死者数上段の%）が亡くなった計算になります。この計算上の数字は実態に近いと思います<sup>6</sup>。

第二波から第五波の頃になると、PCR検査は充分に行われ、重症化率や死亡率は実態を表しているはずで、第二～五波での重症化率は1～2割、死亡率は1～2%となります。冒頭の世界の感染者数と死亡者数のグラフも二桁の差で推移しているので、新型コロナの死亡率は世界でも数%と言えそうです<sup>7</sup>。

第六波は、感染者数も死亡者数も前述したように第五波までと比べるとけた違いに大きな波です。その第六波は今も進行中ですが、重症者数に注目するとまったく違う側面が見えてきます。第六波はびっくりするほど重症者が少ないのです。ピーク時で感染者数の1%です。直近<sup>8</sup>ではさらに下がって、0.2%になっています。オミクロン株とその亜型は、まるで別の新型コロナになったといえそうです。

これほど重症化率が下がっているのに、一つだけ、おかしい点があります。重症者数と死亡者数の比が18%（ピーク時）、33%（直近）と第一波よりも高くなっています。これはどうしたことなのか。

まず第一に考えるのは、単純に「重症者を救えなくなった」ですが、これは考えられません。重症者用の薬も揃ってきましたし、医療従事者も重症コロナの対応に習熟してきているからです。「重症患者が重症用病棟に入る余裕もなく、亡くなっている」も考えられません。全国的にどこもベッドに余裕があります。救急隊が入院先や転院先をあちこち探しまわるといふ話は、今は聞かれません。

とすれば、残る可能性は一つです。以前は、基礎疾患のある人はコロナが重症化しやすかった。コロナが主で、基礎疾患は従の関係です。しかし今は、基礎疾患が悪化することをコロナが助長している、という可能性です。基礎疾患が主でコロナが従です。コロナウ

<sup>6</sup> 亡くなって発見された人もいましたから、16%（死者数／重症者数）はもう少し低い。

<sup>7</sup> 最近、以下のニュースのように「日本の致死率は低い」と報じられた。しかし私は威張るほどの差ではないと思う。

## 新型コロナ致死率の低さで日本がOECD首位、基本はやはりマスクか

6/20(月) 12:29 配信 115  

**Bloomberg**

（ブルームバーグ）：

新型コロナウイルス感染症の致死率に関する直近の統計で、日本が首位に立った。世界の裕福な国々の中で日本の致死率が最も低い理由について専門家が指摘するのは、マスク着用の継続やワクチン接種率の高さ、長寿大国といった基本的な事実だ。

<sup>8</sup> 二週間と一週間の間隔で感染者数、重症者数、死亡者数のサンプルをとっている。

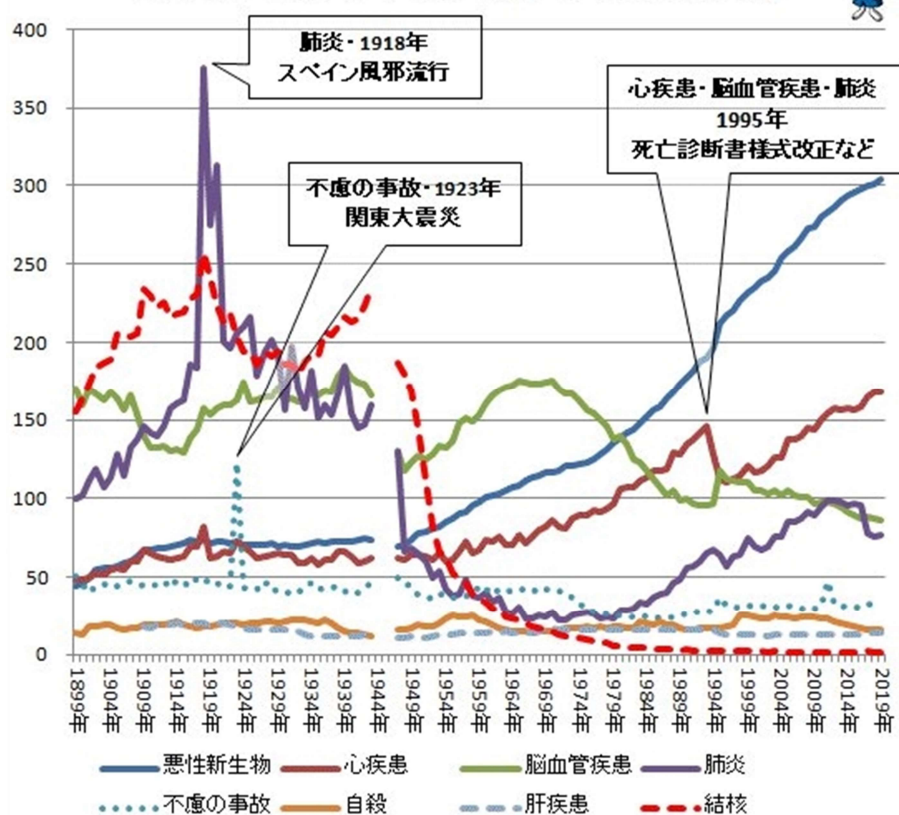
ウイルスは肺炎を起こすほどの悪さはしていないので、人工呼吸は不要です。それでもコロナに感染してからだが弱り、基礎疾患の悪化とそれによる死を助長しているのではないかと私は考えます。

これはコロナ以前にもよくあったことです。たとえば癌の患者が本当に癌死する

ことは稀です。多くは最後に、感染症や栄養失調で亡くなっています。昔の私は過剰診療といわれても白血球を増やすCSF製剤をふんだんに使っていました。あるいは「体重減少は寿命減少」と唱え、さまざまな方法で栄養確保を心がけていました。それは自著でも繰り返し書いたことですが、異端の医療であったことは事実です。世界の末期癌医療の趨勢は、今も昔も「もう良いではないか」だからです。日本の重症化率が激減していることが「コロナ禍は終わった」第三の兆候です。

「コロナ禍の終わり」第四の兆候を確認するために、もう少し大きな目で考えてみましょう。厚生省の統計を100年超でグラフにしているサイトがあります<sup>9</sup>（上図）。本でもよく見かけるグラフです。第二次大戦後一貫してがんと心疾患は増え続けています<sup>10</sup>。脳血管疾患、いわゆる脳卒中は逆に減り続けています。肺炎は2017年の形式的変化を除くと、増え続けています。これらの事実は別に目新しいことではありませんが、全体を見て、改めて驚くのが1918年のスペイン風邪です。コロナ禍の10倍以上の死者数です

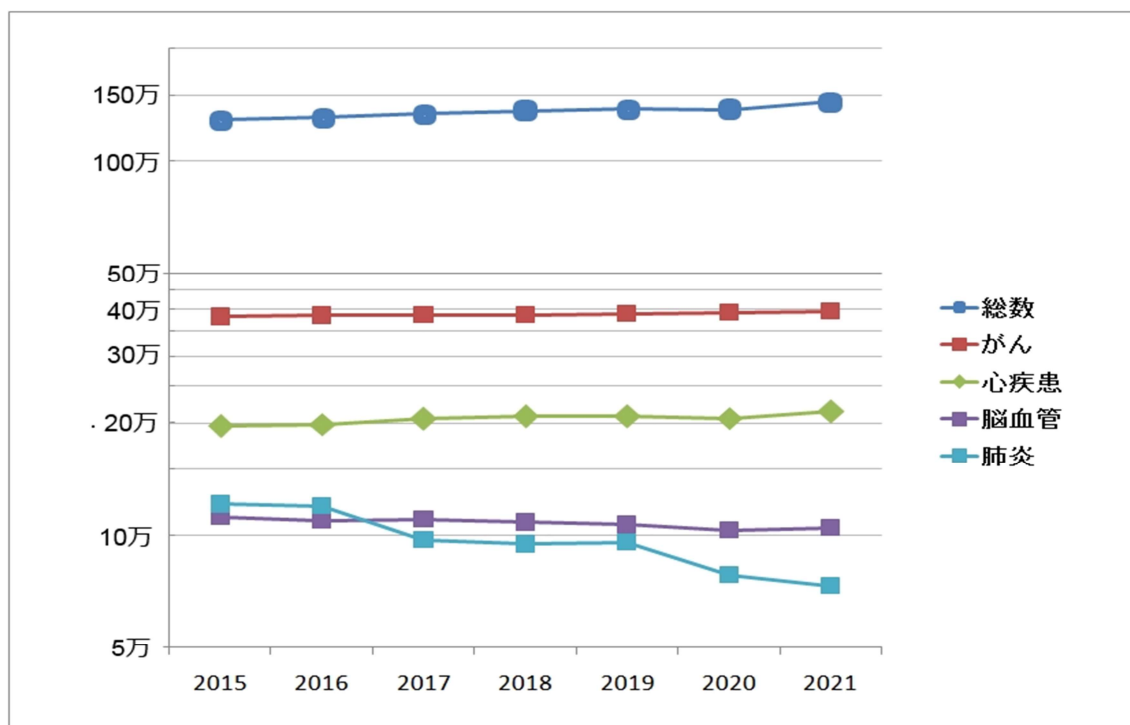
主要死因別にみた死亡率(人口10万対、人)



<sup>9</sup> Yahoo ニュース 2020/9/29

<https://news.yahoo.co.jp/byline/fuwaraizo/20200929-00199953> ただし、残念ながら対数グラフではない。

<sup>10</sup> 1995年に心疾患と脳血管疾患の大きな変化は、死亡診断書の形式が変更されたため。同様に、2017年の肺炎の急減も死因の明確化による形式的な変更が行われたため。



私はこのグラフの続きを作ってみました（上図）。2015年から昨年までの7年間、厚労省のデータをまとめ<sup>11</sup>グラフにしました。すぐにわかるのは、肺炎の奇妙な変化です。2017年の減少は形式的な見かけの減少（脚注10参照）ですが、2020年にそれを上回る割合で減少<sup>12</sup>し、2021年はさらに減少しています。これは、実は外来診療をしている私の感覚にも近いものです。肺炎から風邪に至るまで、あらゆる呼吸器感染がコロナ禍になって激減したと実感していたからです<sup>13</sup>。2020年と2021年の肺炎の日本の総死者数はそれまでと比べて各2万人は減少しています。国内での新型コロナの死者数は2022年6月までに合計3万人ですが、それなのに肺炎は4万人(2年間)も減っています<sup>14</sup>。これは当然の結果でもありま

11

|      | 2015    | 2016    | 2017    | 2018    | 2019    | 2020    | 2021    |
|------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 総数   | 1290444 | 1307748 | 1340567 | 1362470 | 1381093 | 1372755 | 1439809 |
| がん   | 381664  | 384460  | 386390  | 386680  | 389867  | 391545  | 394981  |
| 心疾患  | 196113  | 198006  | 204868  | 208221  | 207714  | 205596  | 214623  |
| 脳血管  | 111973  | 109320  | 109896  | 108186  | 106552  | 102978  | 104588  |
| 肺炎   | 120953  | 119300  | 96859   | 94661   | 95518   | 78450   | 73190   |
| インフル | 2262    | 1463    | 2569    | 3325    | 3575    | 956     | 22      |

死亡率ではなく、実数。

<sup>12</sup> 片対数グラフなので「差」は比を表わす。

<sup>13</sup> その中で、患者数の多い誤嚥性肺炎は口腔内の細菌が肺に「自家感染」するものなので、いくらマスクをしてもまったく意味はない。コロナ禍の影響もまったくないだろう。肺炎の中でも誤嚥性肺炎だけは、対策は口腔内の衛生管理と嚥下能力の維持だからだ。

<sup>14</sup> 新型コロナ以外の肺炎死が7万人減少、これにコロナ死3万人が加わって、結果として4

す。結核に次いでうつりやすい呼吸器感染の新型コロナ対策を全国民が続けているわけですから、インフルエンザも含め他の呼吸器感染症が減るのは当然です。

2020年に始まった日本の新型コロナ対策は、成功したのか失敗したのか。医学の側面から、私は大成功したと断言します。この大成功が「コロナ禍の終わり」と私が言う第四の理由です。

前々頁上図の130年間の死者数の推移をみたとき、スペイン風邪を知らない人でも、一番の衝撃は1918（～1920）年の死者数でしょう。「その時、日本に関東大震災以上の災害があったのか、戦争でもあったのか<sup>15</sup>」。ではこれから100年後、日本の死亡者数の推移を見る未来の人は何を思うでしょう。もしコロナ禍を知らない未来の人がグラフをみれば「2020（～2022）年頃に日本に悲劇は起きていない。その頃肺炎による死者数が減っているので、何か良いことがあったのかもしれない」と思うに違いないのです。

私はコロナ禍が終わった今でも、そして今後も、コロナ対策のような感染対策は続けるべきだと考えます<sup>16</sup>。年間二万人も肺炎死を減らすことができているからです。コロナがなかったなら、現「コロナ」対策で年間三万人は死亡者が減ったと想像されます<sup>17</sup>。1988年に「交通戦争」と言われた頃、日本の交通事故死は年一万人を超えました。今は交通安全対策が進んで交通事故死は三千人弱にまで減っています。今回の肺炎死年間二万人減はそれをはるかに上回る改善です。

「現行の感染対策のために、どれほど経済的損失があったと考えているのか」という反論はもっともです。それでも私はAC<sup>18</sup>時代の考え方を進めるべきだと思います。たとえば1960～1980年頃を知る人は、当時どんなに日本の空が汚れていたか、海や川が汚かったかご存じだと思います。人々は長く「人間の力は小さく、自然の力は無限で、人間が自然を破壊することなどありえない」と考え、煙突から大量の汚い煙を出し、車は排気ガスを出し、汚物は川に捨てていました<sup>19</sup>。大気汚染の東京都内でランニングをするなど狂気の沙汰でした。水俣病、イタイイタイ病、四日市喘息は象徴にすぎません。安心して泳げる川も泳げる海も、国内にはほとんどなくなってしまいました<sup>20</sup>。でもそこから、日本は環境を守るために相応のコストを払うことで経済活動をすべきと考え方を改めたのです<sup>21</sup>。

---

万人減少にとどまったと考えられる。

<sup>15</sup> 実は太平洋戦争での日本人の死者数は300万人とされるが、厚労省の統計から省かれ、グラフも空白になっている。

<sup>16</sup> 本当に肺炎の死者数が減ったのか、もっと詳しく調べる必要はある。またたとえば、全死亡数の増加は長期の経年変化傾向の範囲内なのか。健診数の減少や、医療現場で癌や心疾患の診療がコロナの影響で非常にやりにくくなった事実もあるからだ。医療現場も国民生活もより洗練された感染対策が望まれる。

<sup>17</sup> 「コロナが無いのにコロナ対策」とは言葉の遊びに聞こえるが、広くパンデミック対策や伝染病対策のこと。

<sup>18</sup> BC(before corona)とAC(after corona)は令和に一致するが、令和をはるかに超える長期間の時間概念だ。

<sup>19</sup> 「水に流す」という日本語はその名残りだ。

<sup>20</sup> 「きれいな海で泳ぐ」は当時、海外旅行の魅力の一つだった。

狩猟生活をやめた(一万～三千年前)人々は、集まって、大勢で力を合わせて灌漑と農耕地の拡大、共同作業の農業をおこなうようになりました。そしてもっと集まって、都市を造りました。この過密な環境から伝染病の爆発が生まれたと言えます。感染環境に負荷をかけて経済活動を行ってきたのです。どんなに劣悪な感染環境で私たちが暮らしてきているか、ペストや結核やスペイン風邪や今回の新型コロナは警告しています。

2003 年、当時の新型コロナ(SARS)は幸いにも日本に上陸する前に終焉しました。2009 年の新型インフルエンザは、幸いにも日本では例年のインフルエンザと大差ありませんでした。過密に暮らす人々を次に襲う感染症は何なのでしょう。たとえば新型鳥インフルエンザの感染爆発は近い将来に必ず起こると予想されています。それはスペイン風邪クラスの大パンデミックなのでしょうか、それとも運よく今回の新型コロナクラスなのでしょうか。

---

<sup>21</sup> 途上国に行けば今でも、忘れかけた日本のひどい環境汚染を思い出すことができる。10 年前のことだが私は、インド、中国、ベトナム、フィリピン、インドネシア、ミャンマー、カンボジアに行って、それを実感した。コロナ前、特にフィリピンは熱帯の国なのに日本以上にマスク大国だった。日本のマスクは BC(before corona)からの感染対策だが、フィリピンのマスクは大気汚染の個人防衛策だ。